

鳩鳥のすのまた川に月すめばあらばれわたる浪の下道
わかれつゝ見るよしも哉瀧の水老をやしなふ名にながれなば
席田を織物ならば亥き浪やいつぬき川のたてとなまし

いく千とせかぎらぬ御代は席田のつるの齡も亥かじとぞ思ふ

蘆がきのまちかき跡を尋ても小島の里にみゆきやはせぬ

世の人があだを結ぶの神なりといのらば心とけざらめやは

〔延喜式二十八〕諸國健兒○中 美濃國一百人○中

諸國器仗○中 美濃國甲六領、橫刀廿口、弓卅

〔日本書紀二十五〕大化元年七月己卯遣忌部首子麻呂於美濃國課供神之幣

〔日本書紀二十九〕四年二月癸未勅美濃尾張等國曰選所部百姓之能歌男女及侏儒伎人而貢
上、十四年七月辛未詔曰東山道美濃以東東海道伊勢以東諸國有位人等並免課役十月庚辰
遣百濟僧法藏優婆塞益田金鐘於美濃令煎白朮因以賜絶綿布

〔續日本紀三〕慶雲四年五月癸丑美濃國言村國連等志賣一產三女賜穀四十斛乳母一人

〔續日本紀七〕養老元年八月甲戌遣從五位下多治比真人廣足於美濃國造行宮九月甲寅至美

濃國東海道相模以來東山道信濃以來北陸道越中以來諸國司等詣行在所奏風俗之雜伎

〔續日本紀七〕正養老元年九月丁未天皇行幸美濃國戊午賜從駕主典已上及美濃國司等物有差

郡領已下雜色四十一人進位一階又免不破當耆二郡今年田租及方縣務義二郡百姓供行宮者租
十一月癸丑天皇臨軒詔曰朕以今年九月到美濃國不破行宮留連數日因覽當耆郡多度山美泉
自鹽手面皮膚如滑亦洗痛處無不除愈在朕之躬甚有其驗又就而飲浴之者或白髮反黑或頹髮更
生或闇目如明自餘痼疾咸皆平癒昔聞後漢光武時醴泉出飲之者痼疾平癒符瑞書曰醴泉者美泉